



Title	懷徳堂・友の会発足後五年間を振り返って
Author(s)	信多, 純一
Citation	懷徳. 1988, 57, p. 11-14
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/90693
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

懷徳堂・友の会発足後五年間を振り返って

懷徳堂記念会理事
懷徳堂・友の会副会長

信 多 純 一



先頃開かれた懷徳堂・友の会運営委員会の席上で、財界側の委員から五周年の記念事業について聞かれ、初めて発足後五年の時の経過に気付かされたのは、ただに私一人だけでなく、大学側委員全員であったようである。馴れぬことを、懸命に努めてきて、過去を振り返る余裕とてなかつたせいであらうか。

★ ★ ★

昭和六十年一月十六日の朝日新聞紙上に、三回連載の懷徳堂記事の一つとして、私も拙文を投じた。題して、「懷徳堂と明治の波」、明治二年懷徳堂が閉鎖された時、十五歳の少年であった中井家の正嫡、中井木菟麿、号黄裳の事蹟を主に取り扱った一文である。

その時の調べで、私の一番印象に残ったことは、校舎を閉鎖し、住み馴れた学校を去ってゆく少年の、愁痛多感の、思いの強さであった。それは、その後の彼の懷徳堂再興運動の軌跡に明瞭にたどり得る。時の教授並河寒泉の門扉に遺した詠草、「百余り四十四とせの文の宿けふを限りと見かへりていづ」は、まさに少年木菟麿の想いでもあったに違いない。

しかし、氏の努力は怠らず、西村天囚氏らの力で明治四十四年、懷徳堂は再興成り、重建懷徳堂も

成った。戦災で建物は失ったが、懷徳堂記念会が遺物遺書を守り続け、大正十二年に受業生を中心に組織された懷徳堂堂友会が戦後も講座、見学会、雑誌「懷徳」の刊行と事業を続けてこられた。

その堂友会の戦後の中心は、大阪大学文学部教授木村英一氏であった。木村氏は永年会長として指導的役割を果たしていたが、時の文学部長田中裕氏は、木村氏停年退官後の懷徳堂の前途を案じられ、学部の人々も講座運営等にかかわる態勢を作られるに至る。しかし実務の多くはやはり堂友会の方々が当ってこられたのであった。

戦後のインフレの波は、記念会の経済的基盤を弱くし、活動に支障を生じてきたことに加え、堂友会の世話人の方の高齢化と共に、将来が危惧されるに及び、実行力に富む宮地裕学部長が道をつけられ、それを継いだ片山良展学部長の誠実この上ない対応と努力、それを補った鳥野守事務長らの力によって、友の会設立に漕ぎつけることが出来た。

山村雄一総長のお力添えで、会長・副会長に弘世現氏・山田稔氏というまことに得難い方々を戴けたことが、どれ程大きい意味を持っていたかと、今更ながら思われる。

とはいえ、友の会の発足までには種々の難関があった。そのため片山氏の払われた御心労は並大抵のものでなかったが、これに加えて会員集めの労苦もあった。この時、日本生命吉田孝氏、ダイキン工業川島巖氏両運営委員のお力添えを頂いて、われわれ不馴れな者までが会社を廻って加入方をお願いするという経過があった。その蔭で、記念会会長堀田庄三氏の住友銀行、当時総務部長臼井孝之氏の的確な御助言があり、氏の援助なくしてはことは十分捗らなかったにちがいない。

この文学部委員を中心とした大学側の友の会発足への動きと共に、堂友会の人々と移行への折衝が持たれた。当時幹事役の山口正男氏、中島安之助氏との間で何度か話し合いが行われた。基本的には

賛成していただいたが、永い伝統があり、戦後の会を実際に支えてこられ、現に会員多数を抱えての両氏としては、苦渋に満ちた会合であったと忖度する。初めに記した木菟麿氏の感慨と、勿論性質は異なるが一脈通じる思いをこの方々は抱かれたと思う。

しかし、時の流れを見、会員の高齢化を憂えておられたこの代表者お二人は、高所に立って遂に解散合流を決意され、堂友会の保有資金を、あげて発足の基金にと御寄付下さった時の感激もまた忘れ得ない出来事であった。その山口氏も発足の年九月、長逝され今は亡い。

こうした人々の想いを、新しく友の会会員となられた支持者の期待を、感得しながら関係者の懸命の活動が始まり、早くも五年目を迎え、予算規模、会員数、共に発足時の倍増という今日の姿を見るに至った。

五年目という御指摘に、互いに顔を見合したのであるが、その時一瞬、去りし日々を思いをはせたのは、これまたあながち私一人でなかったはずである。

★

★

★

昨年は、小規模ながら国際的シンポジウムを開くところまでの力をつけてきた。春秋の講座も、以前から堀田会長が要望されてきた、復古的姿勢にとどまらず、現代に活かす進取の精神で、新傾向を加えつつある。従来からの見学会、雑誌発行も順調であるし、新しい事業、遺跡保存、研究書の複刻刊行、さらには各種古典講座も盛況を呈している。そうして阪大関係者として感謝、特筆すべきは資料収集の成果であろう。新田和子氏のお蔭で中井家資料の全てを、逆瀬允吉氏の御好意で御家蔵資料を購入出来、懷徳堂文庫に友の会から御寄付頂いた。また個人の方からも貴重資料を御寄付頂いたりもしている。

今秋、記念の意味をこめて、広島で講演会を持ち、会の拡がりを求めてゆくことにしたが、五年目を迎えた程度ではまだまだ大規模な行事を行うところまで達していないし、その余裕もない。ただ方針に沿って事業の一つ一つを推行してゆくのみである。

発足当時を思い、五年目を迎えてのやや個人的感懷を記したが、短い紙数では尽せぬ実に多くの方々の御協力をいただいて会はここまで成長してきている。なお今後一層の御支援、御鞭撻を心よりお願いする次第である。

(大阪大学文学部長)